

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏 名	向 村 九 音		
論文題目	近世における大和国諸社の由緒の生成と展開 ～今出河一友（文斎）の活動を中心に～		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長	教授	印
	委 員	教授	印
	委 員	准教授	印
	委 員	准教授	印
	委 員	茨城大学教授	印
	委 員		印
内 容 の 要 旨			
<p>本論文は、在地の神道家の今出河一友の事績を分析し、近世中期における大和国諸社の由緒がどのように生成され、展開していくかを跡づけようとした論考である。</p> <p>一友は、神社の由来が不分明になっていたり、祭神に関して諸説が混在していたりする神社を扱い、そこに「失われた古伝」「世俗と異なる真の伝」を求める傾向があり、諸説のうち由緒の正しい伝を新たに作り出そうとしていたとする。</p> <p>一友の記した由緒記は、あくまでも諸説の存在する中の一つの由緒であり、異説を排し、その神社の信仰をまとめあげるほどの影響力を持つものではなかったが、神社修復の願い出に際して奉行書へ提出されるなど、実際に神社側で活用されたことが認められる。また、その述作した由緒記が社家・社人の家の由緒を形作ることもあり、祭祀権・土地管理をめぐる社人や有力氏族の権力闘争の中で「使われ」、地域社会へ影響を及ぼすこともあったことが認められるとする。</p> <p>第一章「はじめに」で、論文全体の見通しを示したあと、第二章においては、前提として、近世期の「縁起」「由緒」「由来」に関する、歴史系、宗教系、文学系など各分野の先行研究での使用例をまとめ、この論文では「由緒記」という用語で論を進めることを述べ、さらに一友を「神道家」として位置づける立場を明らかにする。</p> <p>第三章以降、本論部に入り、第三章ではまず、今出河一友の経歴とそれと関係する人物について確認がなされる。一友が大和国、特に山辺の地を中心として神社の由緒記を述作していたことを跡づけ、神職からの求めに応じた執筆多かったことなどが明らかにされる。そうして、諸社神職から提供される資料や古伝などが、著作の素地になっていたことを明らかにし、こうした一友の著作・書写本は諸社の神職や神道学者らと共有されうるものであったことが明らかにされる。</p> <p>以下、第四章から第七章にかけては、一友の活動において大きな比重を占めるであろう山辺三社（石上社・大神社・大和社）の由緒記を取り上げている。第四章では、一友著の『物</p>			

部氏口伝抄』『石上布留神宮略抄』を中心として石上社の由緒記を取り上げている。現在の石上社の祭神は布都御魂神・布留御魂神・布都斯魂神であるが、近世には石上社においても祭神をめぐる諸説が存在し、その中には布都斯魂神の祭祀を否定するものもあった。一友は布都斯魂神が他の主祭神に遅れて祀られた「加祭」の神であるという位置づけを強調し、神主忌火らの祖先が祭祀したと述べることで、布都斯魂神の祭祀と神主忌火家の地位とを相互に保証し合うものとしようとしたと考えられるとする。また、若宮出雲建雄神（草薙剣）に関しても、『石上布留神宮略抄』は出雲建雄神と八剣神（八岐大蛇）を同体と見做す立場を取っており、さらに『物部氏口伝抄』において否定されたところの布留神剣（若宮）が布留川から流れ来るという伝承を記す。こうした言説が採られることには、本書が田井庄司村公という下級神職に授与された由緒記であるということが関わっているとする。すなわち、本書においては、日谷に降臨した八剣神を田井庄司村公の祖先が祭祀したという起源を語り、十八世紀初頭現在において田井庄の八剣社の祭祀を司る正統性を得ることが重要であったという。

第五章では、大神社の由緒記である『大三輪神三社鎮座次第』を取り上げ、かねて西田長男氏によって一友偽作が提唱されているが、その説に再検討を加え、古態を残している箇所と一友が新たに述作したであろう部分とを鑑別している。その上で、同書が総体として一友による「編著」（偽作）になると結論づける。さらに、同書に記された率川社を大神君白堤の創祀とする説は、春日若宮神主中臣祐字や無名園の著作中にも認められ、『鎮座次第』の言説が南都において一定共有されうる説であったことを論じている。

第六章では『大倭神社注進状並率川神仕記』附裏書を論じて、同書もやはり一友の手になるであろうことが明らかにされる。同書が大和社を大神社・石上社と並ぶ古社として位置づけようとしたこと、そして、大神神の御子神である率川神を狹井神などを介して大和神とも結び付けようとした動きがあったとする。さらに裏書において、穴師社所蔵とされる斎部氏家牒・貪徴襖詞が引かれ、穴師社の由緒が述べられることは、斎部の古伝の創出と穴師社の復興の動きを背景としているであろうとしている。

第七章では、石上社鎮魂祭の由緒、次第書である『鎮魂祭略次第』と『鎮魂祭次第記』を取り上げ、本祭礼が近世に一友らの手によって復興されている可能性が高いことが明らかにされる。一友は「布留之言本」に新たな解釈を加え、「八剣神事」なる新たな次第を創出したとしている。同時期に臼井雅胤が宮中鎮魂祭を復興していることを指摘し、『鎮魂祭略儀式』に伯家の秘伝を踏まえた箇所が認められることから、両鎮魂祭の復興が全く無関係に行われたとは考えづらいとする。その上で、一友が著した鎮魂祭の次第は、石上社の由緒と密接に結び付いた「石上社」の鎮魂祭の復興（創出）であったと評価づけ、石上社鎮魂祭の次第書の述作が、近世中葉に大和国山辺郡諸社の由緒が互いに重なりを持ちながら生成・編纂されてきた営みの中に位置付けられると論じている。

附論のⅠは率川社像の中世期における変容を、当該期の代表的史料である『大乘院寺社雑事記』を中心に跡づけたものであり、一友による率川社像の新たな創出の前提について整理したものである。

附論のⅡは今日大きな問題として注目される、椿井文書について、南山城の井手の西福寺の資料を用いて分析し、今出河一友の場合の場合との差違を確認しようと試みた論考である。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏 名	向 村 九 音		
論文題目	近世における大和国諸社の由緒の生成と展開 ～今出河一友（文斎）の活動を中心に～		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長	教授	印
	委 員	教授	印
	委 員	准教授	印
	委 員	准教授	印
	委 員	茨城大学教授	印
	委 員		印
要 旨			
<p>本論文は、十七世紀末から十八世紀前半にかけて、石上神社、大神神社、大和社などの山辺周辺の古社を初めとして、大和の国の諸社の由緒を述作した、南都の在地神道家の今出河一友の事績を分析し、近世中期における大和国諸社の由緒がどのように生成され、展開していくかを具体的に跡づけようとした論考である。</p> <p>一友についてはこれまで、歴史学、宗教学、文学などの諸分野の研究の中で、断片的な論考は散見されるが、まとまって論じたものはなく、生没年も未詳で、家柄、経歴に関してもほとんど知られていない。その名も研究者によって、あるいは「一友」「文斎」「若＝」「三枝益人」などさまざまに記載されてきた。学位申請者は、断片的な諸方面に渡る先行論文を総合的に考察し、未収集であった一次資料を集め、丹念に読み込むことで、この人物の姿を浮き彫りにし、近世南都における神仏世界の実相を明らかにしてみせた。きわめて意欲的でかつ斬新な論考と評価できる。</p> <p>申請者は、結論として、一友は、「失われた古伝」「世俗と異なる真の伝」を求め、諸説あるうちの由緒の正しい伝を新たに作り出そうとしていたとする。そうして一友のこのような著作は南都の神職・神道家らに広く共有されうるものであったと指摘している。</p> <p>『物部氏口伝抄』の奥書に、神社修覆願を幕府に提出するに当たり「故実之伝」が求められたため、一友に執筆が依頼されたという成立事情が記されるように、一友の記した由緒記が神社修復の願い出に際して奉行所へ提出され、社家・社人の家の由緒を形作ることもあり、祭祀権・土地管理をめぐる社人や有力氏族の権力闘争の中で使われて、地域社会へ影響を及ぼしていることを指摘する。</p> <p>論全体の構想を略述した第一章に続く第二章において、近世期の「由緒」に関する、歴史学、宗教学、国文学などの諸方面の先行研究をまとめ、「由緒」「由来」「縁起」の使い分けについて整理して、本申請論文の立場を明らかにしていることは、論の一貫性の確保という視点からも有効である。</p>			

ただし第二章において振り返られる研究史は、由緒についての久野俊彦氏、偽書についての馬部隆弘氏ほか、まだ一部に限られており、さらに今後広範な研究史の中に、今出河一友の位置を確定する作業が切望されるところである。

第三章においては、今出河一友の執筆活動を中心とした経歴と関係人物について確認がなされているが、一つ一つの資料にあたって、そこに記された花押を確認するなど基礎的な研究がなされ、一友像確立のために大きな研究上の進展が実現されている。また、その交友範囲について、一人一人の人物の確認によって、一友が大和国、特に山辺の地を中心として神社の由緒記を述作するにあたって、神職からの求めに応じた執筆が多かったことなどが明らかにされ、諸社の神職から提供される資料や古伝などが著作の素地になっていたこと、さらに、こうしたその著作・書写本は諸社の神職や神道学者らと共有されうるものであったことが具体的に示されている。

つづいて、第四章から第六章にかけて、一友の活動において大きな比重を占めるであろう山辺三社（石上社・大神社・大和社）の由緒記を具体的に取り上げ、論述している。

まず最初に、現在確認できる一友の述作活動として、『石上振霊時簡書』、『石上振神宮二座』、『物部氏口伝抄』、『石上布留神宮略抄』などの石上神宮の由緒記を分析し、特筆すべき点として、神職によって実際に「使われた」由緒であり、神社の古伝として受け容れられたこと、一友述作の石上神宮の由緒記は同社社家に伝来しており、特に田井庄司村公に授与されたという『石上布留神宮略抄』では、石上神宮別社の祭祀と社人の家の由緒とが紐付けて説かれていて、社人が吉田家の裁許状を得る動きがあったことを考え合わせると、祭祀権などの権益をめぐった布留郷内の闘争において、一友の手になる由緒記が活用されていたことが想定できるとする分析は手堅い。当該社家・社人が祭祀に携わることの正統性を保証するための「家の由緒」としても、一友の著作が機能していたことを指摘している。そうした意味において、これらの由緒記は、社寺内だけにとどまらず、近世南都の地域社会における権力構造にも影響を及ぼすものであったとする点は、今後の研究のさらなる広がりを示していると評価することができる。

論文では続いて、一友の書写奥書を持つ、大神神社の由緒記『大三輪神三社鎮座次第』と大和神社などの由緒記『大倭神社注進状並率川神社記』附裏書について、十二世紀後半に大倭直盛繁によって著されたとされるが、そこまで遡ることが難しい叙述も含まれており、全体としては一友の述作（偽作）であると論じる。ただし、一書全体が一友の創作になるのではなく、部分的には古態を留めている箇所もあり、記紀、『古語拾遺』、『先代旧事本紀』の引用など、新たな記述を加えることで、信憑性を保障していたとする。そうした叙述方法によって、諸説が入り乱れ起源がわからなくなっていた神社の祭神や祭祀の由来について体系的な由緒を創出しようとしていたと評価づける。そうして一友のこうした著作活動は南都の神職・神道家らとのつながりに支えられたものであり、背景として、限られた言説を共有する場としての「コミュニティ」の存在＝諸社の神職や神道家らによって構成され、写本の貸借やさらには相伝の授受を行うことを可能にするつながりを、指摘している点は、この論文の大きな魅力となっている。

論文中に挿入された、附表Ⅰ「石上社由来記の一覧」や表Ⅰ「今出河一友著作・書写本の一覧」、同Ⅱ「（大阪府立中之島図書館）石崎文庫所蔵大神宗次関連典籍の一覧」などは、いずれも申請者が長年の実地調査等を踏まえて独自にまとめ上げたもので、論文の論旨を保証するものであり、また今後のこの分野の研究の基礎となるものである。

附論Ⅰ、Ⅱはともに既発表の関連論考で、すでに学会からも一定の評価を得ているものであるが、全体の論旨を補強する役割を果たしている。

以上のように、本論文は、大和国諸社を対象とした今出河一友の由緒記述作活動に対してはじめて総合的な考察を加えたものであり、近世南都の社寺や地域社会の構造に少なからぬ影響力を持つものであったことを明らかにした優れた学問的成果と評価することができる。申請者自らが論中で述べるように、本論文はあくまで由緒書を中心とした分析であり、一友の神道家としての全体に及ぶものではない。しかし如上のごとく近世南都の歴史的叙述を歴史叙述のあり様を鮮明に浮きあがらせれた本格的な研究であり、一友の著述が「事実」とし今日の市町村史等に直接に影響を与えていることも鑑み、研究書としての早期の刊行が望まれるところである。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。